47 耳掛け型遅延聴覚フィードバック装置を用いた吃音訓練 －成人吃音者を対象に－

研究所 感覚機能系障害研究部　酒井奈緒美　森浩一
学院 非常勤講師　小澤恵美、病院 第二機能回復訓練部　餅田亜希子

[はじめに] 吃音者は聴覚変換フィードバック（AAF）条件下で発話すると吃音が減少することが古くから知られており、特に遅延聴覚フィードバック（DAF）は訓練プログラムにおいて流暢性の確立に利用されてきた。しかしその訓練効果の日常への般化は困難であり、また AAF 装置を日常生活場面で使うには大きすぎるという問題点があった。1990 年代以降、携帯できる小型の AAF 装置が作られるようになり、さらに 2003 年には Stuart らが耳掛け型の AAF 装置（SpeechEasy®）を開発している。それにともない、小型の DAF の有効性についての研究が進められ、DAF を日常で継続して使用した場合の効果についても報告されているが、日常の発話場面のデータからその有効性を示した研究はなく、今後のデータの蓄積が必要と考えられる。そこで本研究では、日常場面の発話データをもとに一症例における耳掛け型 DAF の有効性について報告する。

[方法] 主訴が吃音の成人女性 1 名に対し SpeechEasy の DAF 機能を用いた。日常的な装用を開始する前に、両耳による DAF の有効性を音読にて調べたところ、100 ms の delay 条件下で 78%の吃症状の減少が認められたことから、症例が日常的な DAF の装用に適したケースであると判断した。本症例の遅延時間の設定は、症例の希望にあわせ当初 150 ms としたが、1 週間使用した後、症例より変更の要望があったため 200 ms へと変更した。装置の使用場面は、音読、モノローグ、対面での会話、電話とし、それらの場面で毎日合計 15 分以上の使用を依頼した。週 2 回の電話場面での発話の録音記録を依頼し、その発話を客観的データとした。月に 1 回は耳掛け型 DAF を用いた指導を行い、その際、最近の吃症状や装置の効果に関する自己評価表への記入を依頼した。また日々の吃症状についても、毎日 7 段階で評価するよう依頼した。それら自己評価を主観的データとした。なおこの研究は、センター倫理委員会の承認を得て実施した。

[結果と考察] 4 ヶ月の継続的な装置装用前後において、吃音検査を実施したところ、DAF なしの条件下でも装用開始前と比べて装用後に吃頻度の減少が認められた。このことは、携帯型の DAF 装置を継続して日常的に装用することは訓練効果を生じさせ、装置を使用していない時の吃症状をも減少させる可能性を示している。また知人との電話においては装用開始から 2 週間後に吃頻度の減少が認められ、4 ヶ月後も減少した状態が持続していた。しかし、見知らぬ人を相手とした電話では、3～4 ヶ月後でも高い吃頻度が認められた。これらのことから、親しい相手に限定した電話においては、SpeechEasy の数週間の装用が吃症状の減少に有効であったと思われた。症例の自己評価では、症状や発話の際の苦しさは変わらないあるいは悪化していると示され、装置への満足度も中程度となった。この結果は、知人以外との電話場面では吃頻度が高いことを反映している可能性がある。その一方で、自己評価において回避傾向や発話の自然性が改善し、DAF 装置によって発話速度のコントロールが可能であることを認めている。本研究では耳掛け型 DAF の日常的使用が、部分的には日常生活場面の吃症状と心理面の改善に有効であったことが示された。

[謝辞] この研究は厚生労働科学研究費（H14-こころ-001, 15130801, H16-障害-001）の補助を得て行われた。